



2015年11月20日

悲惨指数(misery index)で見るブラジル

公益財団法人 国際通貨研究所
経済調査部 上席研究員 森川 央

2013年6月、公共料金の値上げを発端にブラジル全土に広がった反政府デモへの対応のため、ルセフ大統領は訪日の延期を余儀なくされた。今年、仕切り直しの訪日日程が決まり、12月上旬に訪日が予定されている。それにあわせ、日本国内でブラジル関連のイベント、セミナーなどが増えており、国内の歓迎準備は着々と進んでいる。だがブラジルから届くニュースは暗い。もはや循環的な景気後退という段階ではなく、大不況というべきかもしれない。

今週は、重要な経済指標が3つ発表された。第1はブラジル銀行が発表しているIBC-Br指数。これは月次GDPともいわれるもので、ブラジル経済全体を示す経済活動指数である。9月は前年比-5.9%になり統計開始以来、最大の落ち込みとなった。7-9月期は同-5.0%、リーマンショック後の下落幅を大きく上回っている。しかも当時の下落は短時間で終わったのに対し、今回は既にマイナスは6四半期に及んでいるうえ、終わりが見えない。この指数は実質GDPとピタリと一致するわけではないが相関は強い。GDP統計でも相応の落ち込みが記録されることだろう。

月次GDP(IBC-Br)



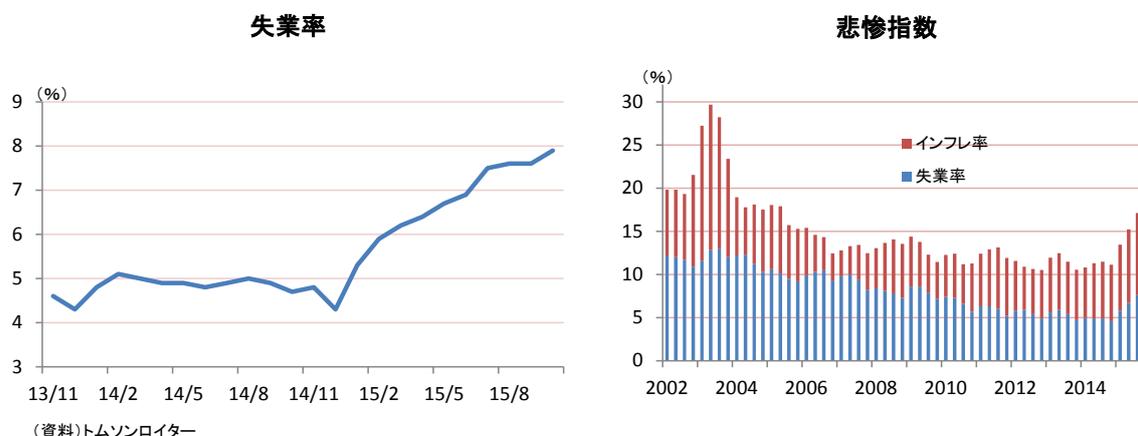
(資料)トムソンロイター

2番目は失業率である。10月の失業率は7.9%（未季調）となり、前年同月の4.7%から3.2ポイント上昇した。最近の動きをみると、この1年間で失業率が急騰し始めたことが分かる。ブラジルのコンサルタント会社は、今後3年で約300万世帯の「新中間層」

が、再び貧困層に転落すると予想している。ブラジルの消費市場は構造的な低迷期を迎える可能性がある。

最後はインフレ。ブラジルはかつてハイパー・インフレに悩まされただけに、物価統計は詳細で、速報値も公表されている。それによると11月中旬の消費者物価上昇率は12年ぶりに2桁を上回り前年比10.2%となった。11月全体のインフレ率も恐らく2桁を上回ることになるだろう。

失業率とインフレ率を加えたものが悲惨指数 (misery index) だ。直近のデータを足すと指数は18.1になる。これは2005年1-3月期以来の高さだ。これよりも高いのは2002年。「経済危機」と呼ばれた年である。



当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。